別　紙　2

論文審査の結果の要旨

論文提出者　髙橋　健一郎

本論文は、その題目が示すとおり、ソビエト体制が確立された 1930 年代半ばから後半にかけてのソビエトにおける「ソビエト語」の言説空間を分析したものである。

「ソビエト語」とはソビエトの公的なイデオロギーを反映した言語であるが、この「ソビエト語」についての従来の研究はその全体をひとつの単純な図式に還元しようとする研究、あるいはスターリンの演説や論文、新聞の社説など、個別のテクストに関して、その語彙項目、修辞技巧、あるいは文体などを記述するという研究が主であった。しかしながら、近年、スターリン時代の全体主義文化の研究が新しく展開されるなかで、「ソビエト語」の全体像を捉えることがますます必要になってきた。本論文は、「ソビエト語」に関する従来の研究を踏まえながら、あらゆるジャンルが互いに浸透し合い、関連しあう「言説空間」という概念を導入することによって、個々のテクストだけではなく、様々なジャンルにおける「ソビエト語」の展開を包括的に捉えようとするものである。しかも、言語学的な研究だけに終わるのではなく、全体主義文化全体の文脈において「言説空間」を研究しようとする果敢な試みでもある。

本論文は、序論、第 1 部 3 章、第 2 部 4 章、第 3 部 3 章、そして補章、終章から構成されている。

「ソビエト語」の研究のための理論的な枠組みを提示した第 1 部では、まず従来の「ソビエト語」の諸研究が批判的に検討され、新しい研究の枠組みを作るためには「ソビエト語」は「ディスコース」のレベルで捉えられるべきであり、ジャンルの問題、言語のイデオロギー的使用の問題などを取り込んだ研究が必要であることが指摘される。そのために、スターリンの言葉を「参照テクスト」とし、それを参照し、応答し、補強するようなインターテクスチュアルな関係をもつ諸ジャンルからなる「言説空間」という概念を導入し、そのモデルを提示する。そして、スターリン時代の言説が物語論的視点から分析され、30 年代以降の基本的な物語構造として「教育の物語」と「闘争の物語」という 2 つのプロット構成があり、その根底には「大家族神話」という神話モデルがあることが指摘されている。

第 2 部と第 3 部では、第 1 部で提示された理論的枠組みが具体的なテクストの分析によって実証される。第 2 部では、まず第 1 次言説というべきスターリンの論争や演説のテクストにおける「論争のレトリック」の分析がなされ、こうしたテクストにおいて時代の「課題」がいかに定式化されるかが示され、個人崇拝につながりうる語法や粛正を正当化するレトリック、そしてこの時代のキーワードが抽出された。さらに、こうしたテクストにおいて、「大家族神話」がどのように位置づけられているか、「教育の物語」と「闘争の物語」がどのように展開されるかの分析がなされ、この二つの物語が３０年代後半のスターリンのテクストにおいてきわめて重要であったこ

とが例証される。

第３部では、ジャンルの言語的特性、メディア的特性に注目しつつ、まず、「上から」語るジャンルとして、スターリンの言葉を直接的・間接的に引用し、反復する新聞の社説やスローガンの言説が、「参照テクスト」としてのスターリンのテクストと相互に依存し合い、関連しあっていることが示される。次に、「上から」のジャンルであると同時に、民衆一人一人が自分の歌として「歌う」という意味で「下から」のジャンルでもある大衆歌の分析がなされる。そして、大衆歌において民衆が自分たちの側からスターリンの「参照テクスト」に応答し、その物語を反復・補強していくことが示される。さらに、「ソビエト語」の言説空間においては、こうした歌において美しく提示された広大な「祖国」、あるいは「あなたとわたし」の間の工場のようなきわめて私的な状況や感情が国家の公的な物語によって意味づけられ、公的な言説を補強し、反復していくという政治性を持つことが指摘される。

論文の叙述は、一つ一つの資料に即してなされ、非常に説得的である。とりわけ「参照テクスト」であるスターリンのテクストを頂点としたヒエラルヒー構造をなすソビエトの「言説空間」を構成するさまざまなジャンルのテクストが、新聞の社説から大衆歌に至るまで、包括的に取り上げられていること、そしてそれらが社会認知モデル、語彙、メタファー、文法、結束制、含意、文体、物語構造などさまざまな視点から綿密に分析されていることは、意欲的であり、従来なかった試みとして特記されるべきである。審査委員のなかからは、こうしたさまざまなテクストを分析した結果、いずれの場合にもテクストが「大家族神話」をその基盤に持つ「教育の物語」と「闘争の物語」という二つのプロットを中心にして構成されているという同じ結論に達しているのではないかという指摘がなされた。しかし、本論文の目指すところは、30 年代のソビエトの「言説空間」においてはさまざまなジャンルのテクストが「参照テクスト」を参照し、それに応答・反復し、互いに補強しあうインターテクスチュアルな関係にあることを例証することであることを考慮するなら、この点についてはむしろ積極的に評価すべきであると言えよう。

また、本論文がもっとも評価されるべき点の一つは、従来は語彙、文体レベルで行われていた「ソビエト語」研究をディスコース分析という視点で捉え返し、1930 年代のソビエトの公的な言説とそれを支えるさまざまなジャンルのテクストを包括的に捉え、ソビエト語の全貌を明らかにできるような視点を提示しえたことである。もう一つは、従来はオーウェルの「ニュースピーク」モデルに従って、全体主義言説においては上から一方的に言語操作がなされるという見方が支配的であったのに対し、民衆自身もみずからそれに応答し、全体主義社会の言説を支えるという側面を見過ごすべきではないことを、具体的なテクストの分析によって証明したことである。

ただ、審査委員のなかからは、1930 年代後半を取り上げた根拠が必ずしも明確に示されていないこと、言語テクスト以外にソビエト・イデオロギーを支えた他のメディアについての言及が十分ではないこと、そして 1940 年代をあつかった終章の論文全体での位置づけが明確でないことが指摘された。しかしながら、本論文は、いわばこの分野でのパイオニア的な仕事と評価すべきであり、こうした欠陥は今後の研究の過程で当然補われていくだろうとの期待が持てる分析のモデルが提示されていることを考えれば、本論文の価値を損なうものではないことは審査委員全員の一致した結論である。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。